「風はウイルス，寒は細菌，風寒で溶連菌感染症，湿はアレルギー性機転とよみかえると，（痺は）アレルギー性疾患，リウマチ熱の発生病理」だといい，あるいは逆調論篇の「四肢熱」は肢端紅痛症であり，「肉苛者」は椎体外路症候群だと同定しているところなどは，著者ならでは卓見である．

ふたつの「概説」の発展版が，『漢方の臨床』に連載されている（第57巻・第5号から，2010年）ので，併読されたい．

5月号　漢代の医学　その1　『漢書』藝文志・方技略
6月号　漢代の医学　その2　陰陽五行三才
7月号　漢代の医学　その3　解剖学
8月号　漢代の医学　その4　生理学
9月号　漢代の医学　その5　生理学（2）
10月号　漢代の医学　その6　病因論
11月号　漢代の医学　その7　病理学（1）

『素問』第3巻には，「素霊研究」と「運気概説」の2本の論考が付録されている．前者には，「気の医学――『素問』・『霊枢』に現れた気の研究」，「『素問』の医師たち」，「肉苛なる者」が収められ，後者には「『素問』の生気象学」，「運気論」が収められている．本書には運気7篇の訳注は備わっていないが，付録によって運気論の大概を知り得る．また「気」はこの医学の最重要語なので，「気の医学――『素問』・『霊枢』に現れた気の研究」という論考は，まさに核心をついている．

（宮川　浩也）

［医道の日本社，〒237-0068 神奈川県横須賀市追浜本町1-105，TEL. 046（865）2161，『黄帝内経素問訳注』，B5判，各巻5,500円＋税．第1巻，2009年2月，564頁．第2巻，2009年3月，531頁．第3巻，2009年4月，576頁．『黄 帝内経霊枢訳注』，B5判，各巻5,500円＋税．第1巻，2008年4月，463頁．第2巻，2008年4月，461頁．第3巻，2008年5月，456頁．］

橋本　明 編著
『治療の場所と精神医療史』

本書の方向性は，橋本による「はしがき」中のつぎの一節がよくしめしている，――

本書が提唱している「治療の場所」の「場所」とは，…〔中略〕…その土地とそこに住む人々の生活や記憶が時間をかけて結びついた「かけがえのない場所」のことである．近代日本の精神医療史を振り返ったとき，それは精神障害者を「場所」から「空間」へと追い立てる歴史だったのではなかろうか．すなわち，医療の西欧近代化が進めば進むほど，神社仏閣，滝場，温泉，宿屋などの自然・社会環境と治療・看護行為とが密接に結びついた「場所」から，私宅監置室や病院・施設といった家族関係や地域社会から閉ざされ，切り離された均質な「空間」へと，患者処遇の舞台がシフトしていったのである．これは明治以来の医療の西欧近代化に根ざした方向ではあったが，同時に施設［＝「空間」］収容の拡大はさまざまな弊害を生みだすことになった．

ここにいう「場所」はplaceに，「空間」はspaceにあたる．

橋本を中心とする近代日本精神医療史研究会は2004年から，各地の「治療の場所」を調査してきた．その成果の一部分が本書である．

第1章「精神医療における場所の歴史 「そこにしかない」場所と「どこにでもある」場所」で橋本は，かれが長年調査してきたゲール（ベルギー）からはじめて，ヨーロッパの精神科医療史（家庭的看護をふくむ），そして日本のそれを，上記引用の立場から概観している．日本に近代精神医学を導入した呉秀三は「治療の場所」についてもっとも多くの記録をのこしており，橋本らの調

査のかなりのものは呉の記載から出発している．

このあとの各章は，現地調査された，戦前あるいは精神衛生法制定時（1950年）まで精神病者療養の場所であった所の記述にあてられている．すなわち，宮城県の定義（じょうぎ）温泉（近藤等執筆），群馬県の滝場，室田不動と瀧澤不動（橋本執筆），千葉県の5寺院（板原和子執筆），静岡県の竜爪山穂積神社（橋本執筆），富山県の大岩山日石寺（兵頭晶子執筆），京都府岩倉の精神病者預かり（中村治執筆），大阪府下山地の星田妙見道場（板原執筆），徳島県の阿波井神社（現在その脇に阿波井島保養院が設立されている）（兵頭執筆）である．執筆者のうちで精神科医は近藤だけである．それぞれの地の歴史，人びとの暮らし，民俗，宗教，人情のなかで精神病者がどう処遇されてきたか，いまそこにくらしている人たちの記憶をほりおこして，かたられている．呉らのみじかい記述だけで完全に過去のものとなっていたものが，ここにいきいきとよみがえっている．そして，近代医学の目からすると迷信的ともみえるそれらの場所での処遇で，精神病者たちはおもいがけぬほどに快方にむかっていったらしい．橋本がいう「場所」の効用がそこにうかびあがっている．

板原がしらべた千葉県の5寺院における精神病者の参籠も，東京の至近であった市川市の3寺院では本来の参籠で，その地域に精神病者をうけとめる場のなかった2寺院では，治療，収容としての性質をつよくもっていた．この対比はきわめて興味ふかい．

兵頭は，大岩山日石寺における灌滝（それは生活のなかにあり祈りとむすびついていた）が精神病学者の目で“水治療”とみなされたとき，地域社会にいきていた病者が“疾病ある一個人として処治すべき”ものとして析出され，地域から病者が排除されることにつながる，として近代精神医学の思想をはげしく批判している．

中村は，岩倉で精神病者預かりが可能になった条件を，京都市街からの距離および交通事情，岩倉の地形，経済的条件，里子預かりの伝統などと，みごとにときあかしていて，さすがに岩倉をふかくしる人の目と感心した．

兵頭は，阿波井島保養院を論じるなかで，精神病院法が“罪を犯した者にして司法官庁特に危険の虞ありと認むるもの”を精神病院に収容するよう規定したことにより，精神病者監護法も厳重“監護”の方へうごいた，としるすが，これは事実認識をあやまっている．精神病院法により，監禁（厳重監護）でない治療的処遇が可能になったのである．

本書は全体として，近代精神医学の方向，とくに日本におけるその惨状への全面的批判である，と評価できよう．橋本が「あとがき」にいうように，精神科医療が今後目ざそうとしているのは，“場所”性の復活であって，それに本書はおおいに参考になるだろう．どうすればそれが可能か，本書は直接にはかたっていない．読者が自らの実践をとおしてさぐっていくしかないのだろう．中村にきくと，岩倉地区には現在精神科病院が二つあるが，そこでは病院は“空間”になっていて，かつてあった“場所”の名残りはみられない．

ところで，橋本が指摘するような“空間”化は，精神科医療においてもっともつよくおこっていることではあるが，おなじことは医療全般にもあてはまるのでないか．さらにいえば，近代化とは，それぞれの機能を分化させ生活を分断することである．こうみてくると，ここに提起されているのはじつに容易ならぬ問題である．

もう一つ，本書でとられている方法のなかでは聞き取りがおおきい．人は過去をかたるとき，自然に己れの過去を美化する．本書にひかれている何人かの語りはあまりに自信にみちみちている．それをどう検証していくのか．このさい聞き取りの方法についてさらに論じていく必要があろう．

（岡田　靖雄）

［日本評論社，〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4，TEL. 03（3987）8611，2010年9月，A5判，264頁，4,700円＋税］